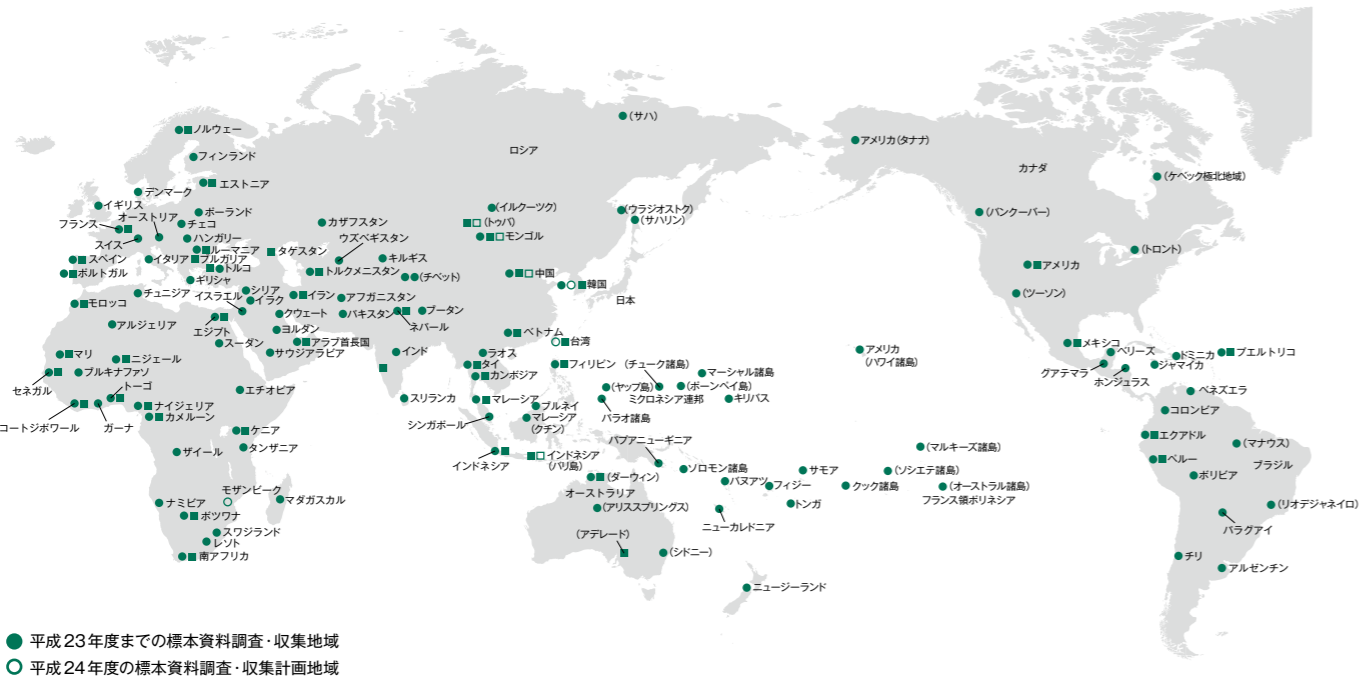


資料・情報の整備と社会還元

本館では、文化人類学・民族学を核とする諸分野の資料や情報を集積・整備して国内外研究者の共同利用に供するとともに、展示や各種事業などを通じて研究成果の社会還元をおこなっています。そのために、資料の収集、管理、情報整備、データベースとコンテンツの制作、展示、各種事業への展開の方法についても研究を重ねています。情報管理施設は、これらの活動を支援するために設けられた附属施設です。

資料とデータベース

標本資料収集および映像取材地域



■ 平成23年度までの映像取材地域
□ 平成24年度の映像取材計画地域

諸資料の所蔵一覧 平成24年3月31日現在

標本資料	277,195点
海外資料	175,019点
国内資料	102,176点
映像・音響資料	70,507点
映像資料	7,856点
音響資料	62,651点

文献図書資料	
図書	643,925冊
日本語図書	259,454冊
外国語図書	384,471冊
雑誌	16,635種
日本語雑誌	9,935種
外国語雑誌	6,700種

HRAF Human Relations Area Files	
地域(民族集団)ファイル	385ファイル
原典(テキスト)	7,141冊

データベース一覧 平成24年3月31日現在

本館の所蔵資料をはじめ、さまざまな研究資料や研究成果の情報をデータベース化し、館内外の研究者に広く提供しています。
(*印は、館内でのみ利用できるデータベース。各データベース右側の数値は収録レコード数。)

標本資料	
標本資料目録 本館が所蔵する標本資料(生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など)の情報。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録(画像付き)。	245,337件
標本資料詳細情報 本館が所蔵する標本資料(生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など)の情報。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録(画像付き)。	インターネット公開:47,196件 館内公開:245,403件
標本資料記事索引 本館関連出版物から所蔵標本資料の解説部分を抽出し、その書誌事項を標本資料別に整理した情報。	40,337件
韓国生活財 ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあつたすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録(画像付き)。	7,827件
George Brown Collection(ジョージ・ブラウン・コレクション) 宣教師であり神学博士でもあったジョージ・ブラウン氏が19世紀から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料に関する基本情報(画像付き)。	2,992件
カナダ先住民版画 * 本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説(画像付き)。特別展「自然のこゑ 命のかたち—カナダ先住民の生み出す美」(2009年)の展示資料を中心に収録。	158件
映像・音響資料	
映像資料目録 本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVD等の情報(写真資料は除く)。	7,825件
ビデオテーク 本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。ビデオテークブースと同じメニューで番組を探したり、キーワードで検索が可能。	606件
音楽・芸能の映像 本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。	849件
ネパール写真(日本語版、英語版) 「西北ネパール学術探検隊」(1958年)に参加した高山龍三氏(当時大阪市立大学大学院生)らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報(画像付き)。	3,879件
松尾三憲田蔵絵葉書コレクション 松尾三憲(みのり)氏が、1919(大正8)年から1923(大正12)年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報(画像付き)。高精細でデジタル化した絵葉書画像の連続的な拡大が可能。	169件
朝枝利男コレクション * 朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真に関する情報(画像付き)。	3,966件
タイ民族誌映像—精霊ダンス— * 田辺繁治氏(本館名誉教授)が調査したタイの精霊ダンスの写真情報(画像付き)。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告(タイ語)とも関連づけられている。	写真:10,082件 調査報告:41件
東南アジア稲作民族文化総合調査団写真 * 日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団(1957年)と第二次調査団(1960年)が記録した写真の情報(画像付き)。	4,393件
オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真 * 小山修三氏(本館名誉教授)が、1980年から2000年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀礼から風景までの多彩な写真の情報(画像付き)。	8,043件
西北ネパール及びマナスル写真 * 「西北ネパール学術探検隊」(1958年~1959年)が撮影した写真の情報(画像付き)。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」(1953年)科学班(推定)の写真を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。	620件
京都大学学術調査隊写真コレクション * 「京都大学アフリカ学術調査隊」(1961年~1967年)が撮影した写真の情報(画像付き)。	11,663件
梅棹忠夫写真コレクション * 本館初代館長の梅棹忠夫氏が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報(画像付き)。	35,420件
音響資料目録 本館が所蔵するレコード、CD、テープ等の情報。	62,453件
音響資料曲目 本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、および昔話の一話単位の情報。	346,772件
文献図書資料	
図書・雑誌目録 本館が所蔵する図書・雑誌の書誌・所蔵情報。	図書: 643,925件 雑誌タイトル: 16,635件
言語資料	
中西コレクション—世界の文字資料— 世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中亮氏が世界各地で収集。	2,729件
吉川「シュメール語辞書」 吉川守氏(広島大学名誉教授)が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。 キーワード:33,450語(40,596頁)	
Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok(ボントック語音声画像辞書) Lawrence A. Reid氏(ハワイ大学名誉教授)が編集した、フィリピンルソン島北部で話されるボントック語のギナアン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。 見出し語:7,636語	
日本昔話資料(稲田浩二コレクション) 稲田浩二氏(当時京都女子大学教授)らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料(446本のテープ・約190時間)の情報(音声付き)。音声は館内限定公開。	3,696件
服装・身装文化資料	
衣服・アクセサリ 本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリ標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報(画像付き)。	18,990件
身装文献 身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1)服装関連日本語雑誌記事(カレント)、2)服装関連日本語雑誌記事(戦前編)、3)服装関連外国語雑誌記事、4)服装関連日本語図書、5)服装関連外国語民族誌で構成。	144,944件
近代日本の身装電子年表 洋装がまだ日常に定着していなかった1868年(明治元年)から1945年(昭和20年)の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の画像」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。	9,858件
その他	
国内資料調査報告集 * 日本国内における、1) 民具などの標本資料類の所在、2) 伝統技術伝承者の所在、3) 民族・民俗映像記録の所在、4) 民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集(1980年~2003年)をデータベース化。	21,373件

諸資料の利用 平成23年度

本館の所蔵する諸資料は、館内外における諸分野の研究や大学教育、他の博物館への貸付などを通しての社会還元にご利用されています。諸資料の利用に関するお問い合わせは、「民族学資料共同利用窓口」で受け付けています。平成23年度受付件数は、484件です。

民族学資料共同利用窓口

TEL・FAX 06-6878-8213

URL <http://www.minpaku.ac.jp/research/sharing/helpdesk>

1 標本資料の貸付件数 9件 貸付資料数 530点

上記のうち、展覧会の展示点数全体における本館資料の貸付件数の占める割合が50パーセントを超えるもの

貸付先	展覧会名	展覧会期間	貸付資料	貸付点数/全体の展示点数・貸付資料が展示資料に占める割合
日本万国博覧会記念機構	「岡本太郎 地底の太陽展」	平成23年8月27日～10月10日	仮面など	121点/176点(69%)
蔚山博物館(韓国)	特別企画展「75年ぶりの帰郷、1936年蔚山の達里」	平成23年11月29日～24年4月29日	婚礼用衣服・農具など	78点/100点(78%)
徳島県立博物館	企画展「鳥居龍藏の見た台湾」	平成24年1月28日～3月11日	玩具・発火具など	116点/227点(51%)

2 標本資料の特別利用(原板使用・写真撮影・熟覧)件数 74件

上記のうち、大学関係9件(調査研究、著作の参考資料としての写真利用など)

3 映像資料の利用件数 187件 貸出点数 2,866点

上記のうち、大学関係43件 265点、研究用(個人・研究会など)56件 543点

4 文献図書資料

特別利用(原板使用・写真撮影)12件 (うち調査研究、著作への写真使用など8件)

文献複写受付 8,211件(うち大学などの機関 3,410件) 文献複写依頼 280件

現物貸借受付 888件(うち大学などの機関 845件) 現物貸借依頼 283件



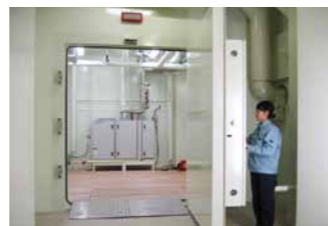
標本資料収蔵庫

資料の保存

本館では、研究の実施にともない各種の学術資料を収集しています。資料の大半をしめる標本資料には、虫やカビの害を受けやすい有機素材が多く使われているため、資料の防虫・殺虫対策には特別な注意を払っています。たとえば海外からの新着資料には、収集地と日本の自然環境や生態系が大きく異なるため、燻蒸庫で薬剤による殺虫・殺菌処理をおこなっています。一方、日本国内に入ってから加害された資料には、できるかぎり薬剤を用いない殺虫処理法をおこなうなど、収集地や加害環境、材質の違いを考慮に入れながら殺虫処理法を使い分けています。このような本館特有の防虫・殺虫対策を有効に実施するため、平成19年に、大型のウォーク・イン高低温処理庫を新設するとともに、既存の燻蒸庫を、二酸化炭素処理や低酸素濃度処理も行える多機能燻蒸庫に改修しました。また、燻蒸使用後の薬剤処理を目的に、触媒燃焼式の除害装置を設置することで、「ひとに、ものに、自然にやさしい」資料管理を実現しています。これらのシステムは、本館が、他大学などの研究者とともに資料の有効活用を支えるためにおこなっている、保存科学研究の成果のひとつでもあります。



ウォーク・イン高低温処理庫



二酸化炭素処理や低酸素濃度処理もおこなえる多機能燻蒸庫

みんなく図書室の活動

利用案内 開室日時 月・火、木曜日～土曜日 10:00～17:00

*日曜日、祝日、水曜日および博物館休館日は閉室

利用資格 どなたでもご利用できます。貴重図書などの一部を除き、資料の貸出もできます。

貸出をご希望の方は、現住所・お名前を確認できるもの(免許証、学生証など)をご持参ください。

1 教育・研究支援

本館が所蔵する文献図書資料は、専門性の高い蔵書構成となっています。マイクロフィルムリーダーを3台設置し、カラーコピー機での複写サービスも行っています。カウンターには司書資格を有するスタッフが常駐し、大学共同利用機関として、教育・研究活動の支援体制を整えています。

2 文献図書資料の目録情報公開を推進

平成23年度は、世界46言語の図書を目録登録しました。また、遡及入力事業として、日本語図書約29,000冊を始めとして、スペイン語、ドイツ語、スウェーデン語、ポルトガル語、その他諸語、難読語の図書約13,200冊を登録しました。

3 社会貢献など

一般利用者も館外貸出利用ができます。平成23年度の一般利用者の登録者数は262名、館外貸出冊数は1,988冊あり、順調に利用されています。

4 蔵書検索

本館が所蔵する文献図書資料は公開されていて、どなたでも、どこからでもパソコンや携帯電話から検索できます。平成23年度の館外からの検索回数は、パソコン77,028回、携帯電話で3,175回ありました。

学術情報リポジトリ

平成22年1月に一般公開した「みんなくりポジトリ」には、館内出版物『Senri Ethnological Studies』、『国立民族学博物館調査報告(Senri Ethnological Reports)』、『国立民族学博物館研究報告』、『国立民族学博物館研究報告別冊』、『国立民族学博物館研究叢書』等が登録され、利用許諾が取得できた論文を公開しています。その数は、23年度末時点で約3,600コンテンツで、論文のダウンロード利用数は月平均約21,000件に達しています。

民族学研究アーカイブズの構築

本館では発足以来、文化人類学・民族学研究者の研究ノートや原稿、フィールドで作成した映像・録音記録などさまざまな資料を集積してきました。これらを活用すべく図書委員会の下に設置された「アーカイブズ部会」により、平成23年度も継続してアーカイブズ資料の実態調査とリスト作成をおこないました。その成果は「民族学研究アーカイブズ Web サイト」にて公開され、全国の研究者の利用に供しています。今後も継続して実態調査とリスト作成作業をおこない、順次公開していくことをめざします。



図書室カウンター



雑誌コーナー



保存箱に収納されたアーカイブズ資料

展示

展示の理念と構成

みんぱくにおける展示は、文化人類学・民族学とその関連諸分野の研究成果を多様なメディアを通じて社会に公開し、世界各地の文化についての認識を深めるとともに、文化の違いを超えた相互理解の場を提供することを目的としています。展示は、本館展示と特別展示・企画展示とで構成されます。本館展示では、世界の文化の多様性と共通性についての広い理解が得られるよう、常設的な展示をおこなっています。一方、特別展示・企画展示は、特定のテーマについて深く掘り下げた内容の展示を、期間を限って、年に数回開催するものです。

本館展示

本館展示は、地域展示と通文化展示から構成されています。

地域展示では、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地域に分け、オセアニアを出発して東回りに世界を一周し、最後に日本にたどり着く構成をとっています。日本の文化を世界各地の文化との関連の中で理解できるように配慮したものです。みんぱくでは、創設以来、世界の民族文化に優劣はなく、すべて等しい価値をもつという認識にもとづいて、展示をつくり上げてきました。それぞれの文化に見られる違いは、人類の営みの豊かな多様性を示すものとして展示されています。また、世界の人びとの暮らしがよくわかるように、衣食住などの生活用品を中心とした展示になっているのも特徴のひとつです。

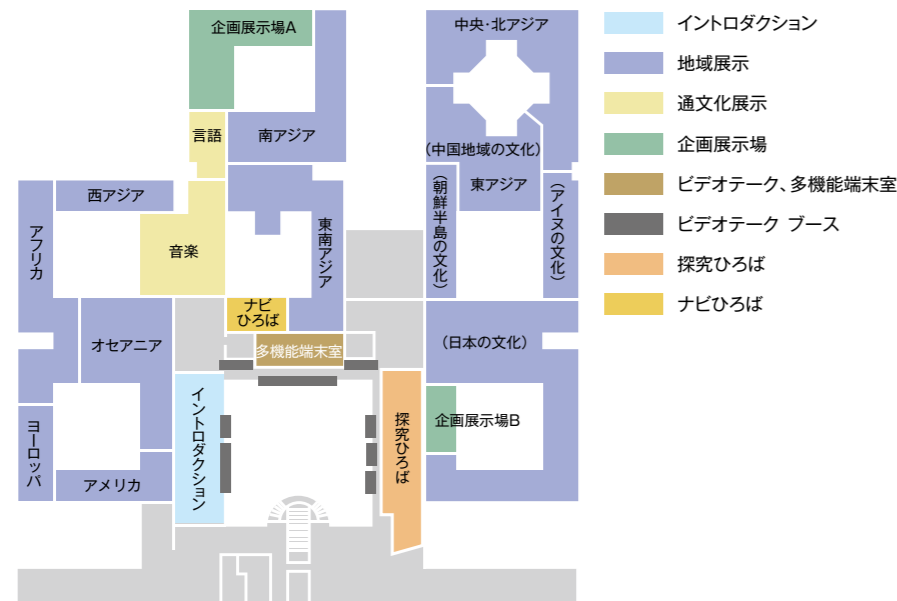
一方、通文化展示とは、地域単位でなく、特定のジャンルを取り上げて広く世界の民族文化を通覧する展示で、現在は音楽と言語についての展示を常設しています。

本館展示は、開館以来30年余が経ち、世界の状況や学問のありかたなどが大きく変化していることにともない、平成20年度から展示の新構築に着手しています。

その基本的な考え方は、以下の5点に要約できます。1.国内外の研究者の力を結集する大学共同利用機能の活用。2.展示に関わる三者、つまり展示をつくる研究者と展示の対象となる文化の担い手、そして展示の利用者が相互に交流し啓発する場、すなわち文化の違いを超えたフォーラムとしての展示の展開。3.地域と世界や日本とのつながりとともに、歴史と現代といった動態も示すグローバル展示への刷新。4.情報提供の高度化や深化。5.利用者の多様な要求にこたえる展示の実現です。

平成21年3月にはアフリカ展示と西アジア展示、22年3月には通文化展示の音楽展示・言語展示と共同利用展示場、インフォメーション・ゾーンの一部(ナビひろば)、23年3月にはオセアニア展示とアメリカ展示が生まれ変わりました。24年3月にはヨーロッパ展示とインフォメーション・ゾーンを新しく構築しました。本館展示場内の2箇所に設けている企画展示場では、期間を限って、現代的な問題や最先端の研究課題など個別のテーマを取り上げた展示をおこなっています。この企画展示場は、国内外の大学等の最新の研究成果を迅速に展示に結びつける、共同利用展示場としても活用しています。みんぱくでは、情報機器を活用した展示を積極的に展開しています。ビデオテークは、映像情報自動送装置として、みんぱくが世界に先がけて開発したものです。約600本の映像番組を自分で選択して視聴することができます。その映像を通じて、本館展示場内で紹介されている民族の生活や、その民族が生み出したモノが実際に用いられている様子を確認することができます。一方、世界ではじめての映像と音声による携帯型の展示解説装置「みんぱく電子ガイド」は、平成19年度に新しいシステムに更新され、軽量化とともに、利便性が大幅に向上しました。

また、探究ひろばでは、情報検索端末を用いて展示資料に関するさまざまな情報を検索したり、比較したりすることができ、関連する書籍やみんぱくの刊行物を閲覧することもできます。



ナビひろば



みんぱく電子ガイド
展示資料が、どのような場所で、どのような人々によって、どのように使われているかを、映像と音声を使って解説する携帯型の展示解説装置です。日本語版、英語版、中国語版、韓国語版を用意しています。
(平成23年度貸出件数:9,380件)

地域展示

地域展示では、世界を大きくオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、南アジア、東南アジア、中央・北アジア、東アジアの9地域に分けています。(各展示場名横の数字は展示場面積)

オセアニア 660㎡



|移動と拡散 |海での暮らし |島での暮らし
|外部世界との接触 |先住民のアイデンティティ表現

海がほとんどの面積を占めているオセアニアには、大小数万をこえる島々が点在しています。そこには、発達した航海術をもち、根柢農耕を営む人々が暮らしてきました。「移動と拡散」「海での暮らし」「島での暮らし」では、資源の限られた島環境で、さまざまな工夫をして生活してきた様子を展示しています。「外部世界との接触」「先住民のアイデンティティ表現」では、外の世界と出会うなかで、人びとが伝統文化をどのように継承、発展させてきたかを紹介しています。

ヨーロッパ 250㎡



|生業と一年 |宗教・信仰
|産業化とともに |変動するヨーロッパ

ヨーロッパは、16世紀から20世紀にかけて、キリスト教や近代の諸制度をはじめ、さまざまな技術や知識を世界各地に移植しました。現代、この流れが逆転するなかで、世界中からの移民とともに、彼らの文化も社会の一部となりつつあります。ここでは、時間の流れに注目しながら伝統的な生活様式と宗教、近代の産業化、さらに現代の新しい動きが層をなしてヨーロッパをつくりあげていることを示しています。

アメリカ 320㎡



|出会う |食べる |着る
|祈る |創る

広大なアメリカ大陸には、極地から熱帯雨林まで、さまざまな自然環境が見られます。人びとは、それぞれの環境に応じた生活を営んできました。一方で、ヨーロッパ人による征服と植民の歴史を経験したこの地には、日常生活の隅々まで、外来の文化が浸透していきました。ここでは衣、食、宗教に焦点をあて、アメリカ大陸の多様性と歴史の重なりを明らかにするとともに、土着の資源に現代的価値を見出そうとする芸術家や工芸家のすがたを紹介しています。

アフリカ 500㎡

|歴史を掘り起こす
|憩う
|働く
|装う
|祈る
|アフリカの今



人類誕生の地とされるアフリカは、常に外部世界と結びつきながら変化を重ねてきました。私たちが、現在目にするアフリカ大陸の中の、文化や言語の多様性は、そうした変化の結果にほかなりません。人びとの「歴史を掘り起こす」営みに目を向けるとともに、現在のアフリカに生きる人びとの生活のありさまを「憩う・働く・装う・祈る」の4つのコーナーに分けて紹介しています。

西アジア 310㎡

- | 信仰
- | 砂漠の暮らし
- | パレスチナ・ディアスポラ
- | 日本人の中東観
- | 音文化とポップカチャー



中東ともよばれる西アジアの人びとは、自分たちが暮らす地域をマシュリク(日出ずる地)とよび、マグリブ(日没する地)と呼ばれる北アフリカと深い関係を保ってきました。乾燥地帯が大部分を占め、遊牧を生業とする人びとが移動する一方、バグダードやカイロなどでは古来より都市文化が栄えてきました。多くの住民はムスリムですが、ユダヤ教やキリスト教発祥の地でもあります。地球規模の変動の時代に移りゆく人びとの暮らしを紹介しています。

南アジア 600㎡



- | 都市 | 工芸 | 暮らしと科学 | 牧畜
- | 農村 | 漁村 | 神々と人間

インド大陸とその周辺地域は、社会・文化・言語いずれをとっても多様な様相を呈しています。展示では、この地域の民族文化の多様性を、都市や農村の暮らしや宗教生活に焦点をあてて、伝統文化と現代文化の両面を通して表現しています。

東アジア 朝鮮半島の文化 330㎡



- | 歴史と文化 | 食生活 | 衣生活
- | 住生活 | 芸能

巫俗(シャーマニズム)を基層文化とし、外来文化としての仏教、儒教、キリスト教文化が重層的な構造をもつ現代韓国社会の「歴史と文化」を表現しています。パティオには、伝統的な居酒屋「酒幕」があります。

東アジア 中国地域の文化 660㎡

- | 祭りと芸能
- | 山地の生活
- | 草原の生活
- | 高原の生活
- | 都市の生活
- | 地域テーマ展示
雲南の絞り藍染め
台湾原住民族の文化



民族構成が複雑で、文化的にも多様な中国地域のさまざまな環境に対応した生活を紹介しています。「祭りと芸能」では諸民族の生活をいよる祝祭と娯楽を象徴的に表現しています。

東南アジア 730㎡

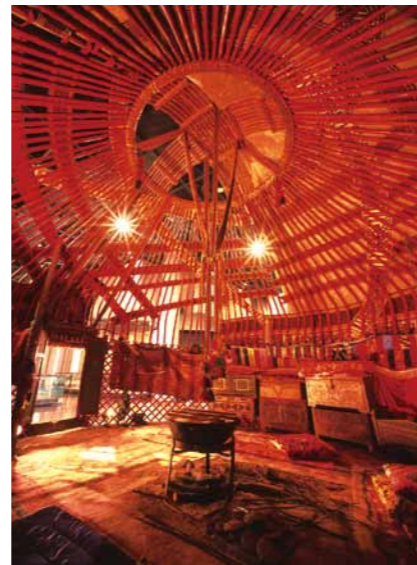


- | 稲作文化 | 海の生活 | 山の生業 | 生活の用具 | 信仰の世界
- | 衣服と装身具 | ワヤンの広場 | 仏教の空間 | 都市の風景

東南アジアでは、インドや中国をはじめとするさまざまな文明の影響を受けながら、国や地域、民族のそれぞれに文化が開花してきました。稲作や精霊の信仰など、風土や生活に根ざした文化も独自に展開しています。展示では、さまざまな文化の織りなす多彩な世界を表現しています。

中央・北アジア 710㎡

- | 中央アジアの遊牧と農耕文化
- | モンゴルの遊牧文化
- | 北アジアの狩猟と漁撈の文化
- | シャーマニズムの世界



ウラル山脈とカスピ海を結ぶ線の東にあたる中央アジアから、モンゴル、シベリアに至る広大な地域を対象としています。展示はカザフとモンゴルの天幕を軸に、トルクメンやキルギスの人たちを含めた牧畜文化、ウズベクやタジクの農耕文化、そして、シベリア諸民族の牧畜と狩猟の生活およびシャーマニズムをとりあげています。

東アジア アイヌの文化 270㎡



- | アイヌの狩猟・漁撈・農耕
- | アイヌの送り儀礼

アイヌの文化の展示では、伝統的ななかやぶき民家、漁撈や狩猟の生活、熊送りの儀礼などと工芸の伝統と現代の世界を紹介しています。

東アジア 日本の文化 1,260㎡



- | 日本の祭りと芸能 | 日本のすまい | 農具と運搬具
- | 猟と山仕事 | すまいの道具 | はきもの・かぶりもの

各地の祭りや芸能との関係を示すとともに、「ハレ(祭礼)」と「ケ(日常生活)」の世界を対比し、日本の風土のなかに展開された農山漁村のさまざまな生活様式を紹介しています。

通文化展示

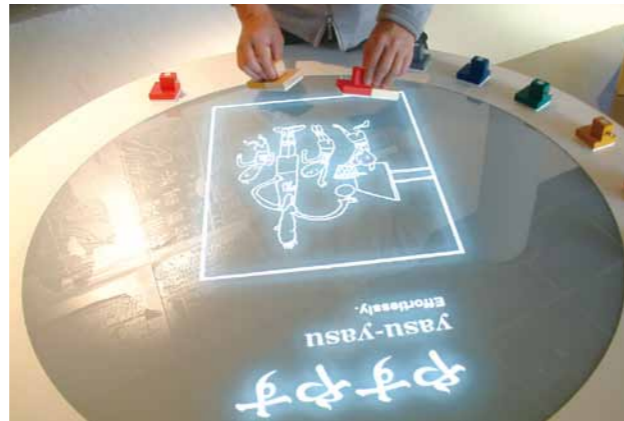
音楽 550㎡



太鼓 荒ぶる音 | ギンギン 伝え交わる音
チャルメラ 演じる音 | ギター 歴史の中の音

私たち人類は、音や音楽によって意志や感情をつたえ、自分の位置を知り、訪れたことのない場所や過ぎ去った時に思いを馳せ、心を奮い立たせたり慰めたりしてきました。また、神仏や精霊など見ることでできない存在と交わってきました。この展示では、音や音楽と私たちの存在とのかかわりを、世界各地の楽器の例を通して考えます。

言語 170㎡



言葉を構成する要素 | 言語の多様性 | 世界の文字

音声や身ぶりを媒体とすることばは、高度に発達した伝達手段で、感情から科学的な知識まで多くの情報を伝えることができます。文化の多様性を反映すると同時に、人間のもつ認知能力や創造性などを生み出すことばは、人類のもつかけがえのない資産です。インタラクティブな仕掛けを通して、ことばの仕組みと世界のことばの多様性について紹介します。

インフォメーション・ゾーン

イントロダクション ビデオテーク



イントロダクション展示は、民博の展示の見方、文化人類学・民族学の考え方を直感的に見につけていただけるよう工夫した、文字通りのイントロダクション(=導入)のための展示です。ここから世界への旅が始まります。



世界の人びとの儀礼や芸能、生活の様子、あるいは展示資料の背景を紹介する映像展示として、昭和52年に世界ではじめて本館が開発しました。その後改良を重ね、マルチメディア番組や研究者がフィールドワークで取材した貴重な研究用映像資料も公開しています。平成24年からの現行システムでは、番組をより多角的に検索できるようメニュー画面を充実させるとともに、ブース内部の雰囲気も明るく変え、視聴環境を整えました。また、車いすに乗ったままご利用いただける、ユニバーサルデザインを意識したブースを3台新たに設置しました。(平成23年度リクエスト件数:66,447件)

探究ひろば



リサーチデスク 調べて深める
研究の現場から 知ってつながる
世界をさわる 感じて広がる

展示資料の情報を検索して調べることのできる「リサーチデスク」、研究者が取り組んでいる調査を紹介する「研究の現場から」、展示資料を見てさわって理解する「世界をさわる」の3つのコーナーを通して、民博の研究や展示をより詳しく知ることができます。展示場で見た資料についてもっと知りたい、民博の研究者って何を調査しているの、モノと身近に接してみたいという探究心を満たし、知識をさらに深める場としてご活用ください。

特別展示

特別展 「ウメサオタダオ展」

平成23年3月10日～6月14日

主催 国立民族学博物館

実行委員長 小長谷有紀

実行委員 [館内] 飯田卓、上羽陽子、太田心平、久保正敏、
中牧弘充、八杉佳穂、吉田憲司

国立民族学博物館の創設に尽力し、初代館長をつとめた梅棹忠夫は、つねに分野をこえて、平易なことばで、斬新な知見をしめしてきました。かれの足跡をたどりながら、その思想の先見性や実効力を発見していただくための特別展を実施しました。名著『知的生産の技術』(1969年岩波新書)ができるまでの直筆原稿などすべてを初公開するとともに、著作集全22巻がどのような観察記録から生まれたものかを復原しました。あくなき好奇心を発揮し、世界をあるき、ひらめきをのがさず、未来を想像し、文明論を構築していった、知的先覚者の軌跡について観覧することによって、入館者一人ひとりが、混迷の時代をこえて未来をつくる羅針盤を得ることができたのではないのでしょうか。



特別展 「千島・樺太・北海道 アイヌのくらし —ドイツコレクションを中心に」

平成23年10月6日～12月6日

主催 国立民族学博物館、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

実行委員長 佐々木史郎

実行委員 [館内] 伊藤敦規、岸上伸啓、齋藤玲子
[館外] 萱野志朗(萱野茂二風谷アイヌ資料館館長)、
佐々木利和(北海道大学アイヌ・先住民研究センター)、
手塚薫(北海学園大学)、出利葉浩司(北海道開拓記念館)
山崎幸治(北海道大学アイヌ・先住民研究センター)

ドイツの博物館のコレクションを中心としたアイヌ文化に関する特別展。平成23年は日独交流150周年にあたり、その関連事業の一つでもあります。ヨーロッパでは19世紀に人類学・民族学が興隆してきて以来、アイヌ文化に対する関心が高く、特にドイツでは生活用具、儀礼用具を中心に多数の民族資料が収集されました。今回はその中からライブツィヒとドレスデンの民族学博物館から152点の資料と30点あまりの写真を借用して展示しました。またこれらの借用資料とほぼ同時期に収集された本館の所蔵資料(いわゆる東大資料)からも展示しました。この展示によって100年前のアイヌの人々のくらしの実像とともに、当時の人々の優れた工芸製作技術を紹介しました。



企画展示

企画展 「民族学者 梅棹忠夫の眼」

平成23年3月3日～6月14日 プロジェクトリーダー 吉田憲司

平成23年春開催の特別展「ウメサオタダオ展」に合わせて、梅棹忠夫が1982年以来国内各地で開催した、本人撮影の写真による写真展「民族学者 梅棹忠夫の眼」を改めてみんぱくの企画展として再構成して展示しました。民族学者・梅棹忠夫がカメラ・レンズを通じて見つめようとした世界を検証するとともに、その梅棹の「眼」を通じて記録された世界の民族の姿をあらためて見直してみようとしたものです。梅棹忠夫本人が撮影し、選定し、コメントを加えた写真を通じて、民族学者としての梅棹忠夫の「眼」の凝らし方、世界との対し方をふりかえることで、日本における文化人類学・民族学の展開に重要な足跡を残した梅棹忠夫に関する学術的研究の深化を図りました。



企画展 「インド ポピュラー・アートの世界～近代西欧との出会いと展開」

平成23年9月22日～11月29日 プロジェクトリーダー 三尾稔

インドのポピュラー・アートは、伝統的な宗教画や細密画を下地に西欧風の構図やモチーフの影響を深く受けて19世紀後半頃に成立した後、宗教画・ポスター・カレンダー・包装デザインなど様々な媒体に展開し、独自の美術ジャンルを形成してきました。このようなアートは人びとの生活に根づき、彼らの宗教観や世界観を半ば無意識のうちに規定し、現代のインドイメージや大衆の美的センスにも大きな影響を与えています。今回の企画展では、インドのポピュラー・アートの成立期から現代までの研究と収集を続けてきたインディラ・ガンディー・国立芸術センター前所長のジョティンドラ・ジャイン博士のコレクション約150点を展示し、インドの人びとの世界観や社会の変容を日用品の中の芸術という視点から紹介しました。



共同開催

共同開催 「ウメサオタダオ展—未来を探検する知の道具—」

平成23年12月21日～24年2月20日(日本科学未来館) 担当者:小長谷有紀

平成23年3月10日から6月14日まで本館で開催したウメサオタダオ展を日本科学未来館との共催により、同未来館で開催しました。本館で実施したときと同様に、『知的生産の技術』ができあがるまでの資料を展示するとともに、本展ではとくに「情報産業論」に関する展示を充実させてバージョンアップしました。

また、未来館でのオリジナル展示として、梅棹の未完の書のタイトルでもあった『人類の未来』のコーナーが設置されました。梅棹忠夫がのこした『人類の未来』の「ごぞね」に、来館者が自分自身でかんがえた未来のキーワードを「ごぞね」にして加筆するという体験をしてもらいます。梅棹が考えた未来をきっかけにして、現代を生きる私たちがあらためて人類の未来を思い描こうというところみであり、来館者が参加した記録が貴重なデータとしてのこりました。

巡回展示

巡回展 「彫刻家 エル・アナツイのアフリカ」

平成23年2月5日～3月27日(神奈川県立近代美術館(葉山))

平成23年4月23日～5月22日(鶴岡アートフォーラム)

平成23年7月2日～8月28日(埼玉県立近代美術館) 担当者 川口幸也

ガーナ生まれでナイジェリア在住の彫刻家エル・アナツイ(1944)は、ヴェネツィア・ビエンナーレにも二度招待されるなど、いまや世界的なアーティストとして知られています。本展示は平成22年秋にみんぱくで特別展として開催されたもので、その狙いは、アートを美術史や美術批評の観点から単にアートとして語るのではなく、文化人類学の視点からも語ることによって、美術史と文化人類学、美術館と民族学博物館の創造的な協力関係を模索することにあります。その一環としてみんぱくでの展示の終了後、国内の近現代美術館における巡回展示を試みたものです。

巡回展 「マンダラ展 チベット・ネパールの仏たち」

平成23年7月30日～9月4日(松本市立博物館) 担当者 南真木人

マンダラは密教(タントリズム)で用いられる儀礼用祭壇でしたが、時代とともに宇宙(世界)の縮図などの意味をもつようになりました。この展示では、チベット、ネパール、日本のマンダラなどを用いて、マンダラの構造と歴史を分かりやすくし、「マンダラとは何か」という問いに迫りました。今回の巡回展示は、平成15年にみんぱくで開催した特別展を展開したものです。

博物館社会連携

本館では、国内外の博物館や大学などとの学術連携を通して、文化資源の系統的、有機的活用を実践するためのネットワークづくりを試みてきました。また、さまざまな団体と連携して、広く社会へ貢献する事業や活動を展開しています。

カムイノミ儀礼と北海道アイヌ協会技術者研修

本館では、社団法人北海道アイヌ協会とのあいだに協定を結んで、ふたつの事業を実施しています。ひとつはカムイノミ儀礼の実施です。カムイノミというアイヌ語は「神への祈り」との意味であり、その実施は、本館が所蔵するアイヌの標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的としています。従来は萱野茂氏(故人、二風谷アイヌ資料館前館長)によって非公開でおこなわれていました。平成19年度からは、ウタリ協会(現アイヌ協会)の支部が順にカムイノミと併せてアイヌ古式舞踊の演舞を公開により実施することとなり、23年度は胆振地区支部連合会の協力を受けました。

もう一つの事業はアイヌ協会が派遣した伝統工芸技術者の受け入れです。本館の所蔵する資料の研究・活用による学術研究の進展とアイヌ民族の文化の振興を目的としています。



カムイノミ儀礼

音楽の祭日 in みんぱく

フランスで始まった夏至の日を音楽で祝う「音楽の祭典」が、平成14年から日本でも「音楽の祭日」として全国で開催されています。

本館もその趣旨に賛同し、15年から音楽を愛する一般市民に広く本館施設を開放して実施しています。23年は、6月26日(日)に19のグループや個人が、さまざまな楽器による演奏をおこないました。

学習キット「みんぱく」

学校機関や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として、学習キット「みんぱく」の貸出を実施しています。「みんぱく」は世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、11種類20パックを用意しています。異文化との出会いにおいてどのようにものを見つめ、それらと語ることができるのか、その先にある物語をどう読みとるのかという、本館ならではのコンセプトで企画されています。

貸出パック 平成23年度 貸出件数のべ208件

- 極北を生きる—カナダ・イヌイットのアノラクとダツルコート
- アンデスの玉手箱—ペルー南高地の祭りと生活
- ジャワ文化をまとう—サルンヒコイン
- ブータンの学校生活
- インドのサリーとクルター
- アラビアンナイトの世界
- イスラム教とアラブ世界のくらし
- ソウルスタイル—子ども的一天
- フリコロージュ
- アイヌ文化にであう
- アイヌ文化にであう2—樹皮からつくる着物



みんぱく
「アイヌ文化にであう2—樹皮からつくる着物」

博学連携事業

校外学習や遠足など博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツールを紹介することを目的として、春と秋の年に2回「先生のためのガイド」をおこない、授業での博物館活用の促進を図っています。また、中学生に「職場体験活動」の機会を提供しており、平成23年度は9名を受け入れました。

博学連携教員研修ワークショップ in みんぱく

本館の展示場や所蔵資料を教育活動に活用した具体的な実践例をもとに、博学連携のさまざまな可能性をさぐるための教員研修ワークショップです。日本国際理解教育学会と共催で、平成23年度は8月5日に開催され、教員(主に小学校など)109名の参加者がありました。実際に参加した教員が、本館を社会科研修に活用するなど、実践的な成果が得られています。

ボランティア団体の活動

「みんぱくミュージアムパートナーズ(MMP)」は、本館の博物館活動をサポートする自律的な組織として平成16年9月に発足した団体です。館内で視覚障害者を対象とした展示場案内、休日・祝日などのイベント、学校団体向けの展示場体験プログラムの企画、運営といった多岐に広がる活動を本館との協働で進めています。

「地球おはなし村」は、平成15年に開催した特別展「西アフリカ おはなし村」を契機とし、17年10月に発足した団体です。アフリカの音楽活動や昔話の語り活動等をおこなっており、近隣の児童センター、小学校および児童福祉施設などでも広く活動をおこなっています。

国際協力・研修

JICA 集団研修:「博物館学コース」運営 “Comprehensive Museology”

このコースは、博物館の運営に必要な、収集・整理・研究・展示・保存に関する実践的技術の研修を実施し、博物館を通じて各国の文化の振興に貢献できる人材を育成するものです。従来から、JICA 集団研修「博物館技術コース」の一環として、本館で約3週間にわたり「博物館学国際協力セミナー」を実施してきましたが、平成16年度からは、本館が国際協力機構(JICA)から全面的委託を受け、滋賀県立琵琶湖博物館と共同で、4ヶ月にわたる研修を「博物館学コース」として実施しています。毎年、世界の様々な国から約10名を外国人受託研修員として受け入れています。



その他の研修事業協力として以下のものがあります。

平成23年9月26日～10月14日 独立行政法人国際協力機構 エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト(フェーズ2)(1カ国9名)



閉校式



殺虫処理技術習得のための研修風景

広報・事業

本館では、研究活動を広報するとともに世界の諸民族についての理解を深めてもらうために、最先端の研究成果を社会一般に向けて公開する各種事業や広報活動を実施しています。

みんぱくゼミナール

毎月第3土曜日に、研究部の教員などが最新の研究成果をわかりやすく講演しています。

平成23年度実施 受講者総数 2,330名 (平成22年度 2,391名) □印は特別展開連事業 ■印は新展示関連事業

実施回数	実施日	担当講師	演題
□ 395回	平成23年4月16日(土)	山極寿一(京都大学) 司会:小長谷有紀	霊長類学からみたウメサオタダの文明論
□ 396回	平成23年5月21日(土)	中生勝美(桜美林大学) 司会:小長谷有紀	青年ウメサオタダの学問形成
397回	平成23年6月18日(土)	関本照夫	布・人・技、そして環境
■ 398回	平成23年7月16日(土)	印東道子	オセアニアへの人類の移動—島嶼(とうしょ)環境を住みこなす
■ 399回	平成23年8月20日(土)	小林繁樹	海に生きるくらし—島と島をつなぐ遠洋航海
400回	平成23年9月17日(土)	伊豫谷登士翁(一橋大学) 須藤健一	グローバリゼーションと移民
□ 401回	平成23年10月15日(土)	齋藤玲子	物にみるアイヌ文化の地域性—周辺民族との比較
□ 402回	平成23年11月19日(土)	佐々木利和(北海道大学)	絵画にあらわれたアイヌの風俗
403回	平成23年12月17日(土)	菅瀬晶子	中東のキリスト教徒—したたかなマイノリティ
■ 404回	平成24年1月21日(土)	伊藤敦規	アメリカ南西部先住民の宝飾品
■ 405回	平成24年2月18日(土)	中牧弘允	カレンダーから現代宗教を見る
406回	平成24年3月17日(土)	田村克己	文化とアイデンティティー—ビルマ/ミャンマーの今



第400回「グローバリゼーションと移民」



第405回「カレンダーから現代宗教を見る」

みんぱくフォーラム

平成20年度から本館展示場の新構築が始まりました。23年度には新しくなったオセアニア展示及びアメリカ展示を広く社会に紹介するために、夏と春にそれぞれ「どっぶりオセアニア—夏のみんぱくフォーラム2011」「たっぷりアメリカ—春のみんぱくフォーラム2012」と題して、研究公演、映画会、セミナー、ギャラリートークなどのイベントを実施しました。24年度は、新設した探究ひろばに合わせて「夏のみんぱくフォーラム2012 知りたい、触れたい、調べたい—『みんぱく流』探究のすすめ」を実施し、翌春にはヨーロッパ展示の新構築に関連したフォーラムを開催する予定です。

みんぱく映画会

上映される機会の少ない文化人類学・民族学に関する貴重な映像資料などを教員の解説を交えて上映しています。

平成23年度実施 参加者総数 2,285名 □印は特別展開連事業 ■印は新展開連事業

特別展「千島・樺太・北海道 アイヌのくらし—ドイツコレクションを中心に」関連「アイヌ民族の過去と現在」

実施日	担当講師	題名	参加者数
□平成23年10月9日(日)	宇梶静江(古布絵作家、アイヌウタリ連絡会代表)、岸上伸啓	TOKYOアイヌ	243名
□平成23年10月30日(日)	岡田正子(映像史研究家)、齋藤玲子	Beautiful Japan(美しき日本)	184名
□平成23年12月4日(日)	内田順子(国立歴史民俗博物館)、佐々木史郎	Ainu Past and Present —マンローのフィルムから見えてくるもの	233名

みんぱくワールドシネマ—映像に描かれる〈包摂と自律〉

機関研究〈包摂と自律の人間学〉のテーマにふさわしい映画を選び、研究者の解説による上映会をシリーズで実施します。立場による考え方の違いを互いに認め合いながら、公正で平等な社会をどのように実現すればよいか、世界各地に視野を広げて、映画を通して考えます。

実施日	担当講師	題名	参加者数
第10回 平成23年5月28日(土)	小林昌廣(情報科学芸術大学院大学)、鈴木紀	海を飛ぶ夢	240名
■第11回 平成23年7月9日(土)	久保正敏、白川千尋	裸足の1500マイル	297名
■第12回 平成23年8月21日(日)	飯嶋秀治(九州大学)、鈴木紀	サムソンとデリラ	351名
■第13回 平成24年1月14日(土)	松下洋(京都女子大学)、鈴木紀	今夜、列車は走る	307名
■第14回 平成24年2月19日(日)	關雄二、鈴木紀	パチャママの贈りもの	430名

研究公演

世界の諸民族の音楽や芸能などの公演を実施することによって、参加者に文化人類学・民族学に関する理解を深めてもらうことを目的としています。

平成23年度実施 参加者総数 3,253名 □印は特別展開連事業 ■印は新展開連事業

□心に草原を一馬頭琴がひらく、新たな世界

実施日 平成23年5月5日(木・祝)
解説 小長谷有紀、A.バトエルデネ
出演 A.バトエルデネ 他
参加者数 498名



■フラを知る、フラを踊る

実施日 平成23年7月23日(土)
解説 丹羽典生、古賀まみ奈
出演 古賀まみ奈 他
参加者数 448名

■カヴァ儀礼と天地創造のドラマ

実施日 平成23年7月30日(土)、7月31日(日)
解説 丹羽典生、アポロニア・タマタ 他
出演 ヴァカヴォヴォトグループ
参加者数 578名

■マオリの伝統芸能カバハカ

実施日 平成23年8月6日(土)、8月7日(日)
解説 ビーター・マシウス、小杉世(大阪大学)、ジュンコ・マオアテ(ナ・ハオ・エ・ファ)
出演 ナ・ハオ・エ・ファ
参加者数 843名

□アイヌ音楽ライブ トンコリ×ウボボ

実施日 平成23年10月16日(日)
解説 齋藤玲子
出演 OKI、マレウレウ
参加者数 443名

■アンデスの詩

実施日 平成24年2月11日(土・祝)
解説 關雄二
出演 瀬木貴将、越田太郎丸、佐山こうた
参加者数 450名

■ホビの踊りと音楽

実施日 平成24年3月20日(火・祝)
解説 伊藤敦規
出演 フレデリック・アンドリュース、ジェロ・ロマベンティマ 他
参加者数 563名

みんぱくウィークエンド・サロン—研究者と話そう

研究部のスタッフと来館者が、展示場内で、より身近に語り合いながら、みんぱくの研究を知ってもらうことを目的に、開館30周年記念事業として平成19年度に始まりました。23年度は計48回おこなわれました。来館者のみなさまから好評をいただき、24年度も引き続き4月1日(日)からほぼ毎週日曜日に開催しています。



会場風景

吹田市との連携協力

吹田市との連携協力に関する基本協定を締結しています。この協定は、歴史的・文化的資源の活用及び知的・人的資源の交流を図ることにより、産業、教育、文化、まちづくりなどの分野において、双方の発展と充実に寄与し、地域連携を積極的に推進することを目的としています。

また、「吹田市5大学・研究機関 生涯学習ナビ」(<http://www.suita5u.com/index.html>)へ参画し、情報発信を進めています。

マスメディアを通じた広報

広く社会にみんぱくの研究や博物館活動について広報するため、マスメディアを通じた広報活動を展開しています。平成21年度からは、「報道関係者と民博との懇談会」(毎月第3木曜日開催)において、「みんぱくの研究最前線」などのコーナーをもうけ、みんぱくの研究を積極的に紹介しています。23年度はテレビ(19件)、ラジオ(35件)、新聞(661件)、ミニコミ誌(61件)、雑誌(60件)、その他(55件)の各媒体総数891件で、本館について紹介されました。

「旅・いろいろ地球人」

平成21年4月から毎日新聞夕刊(毎週木曜日)に掲載。

平成17年4月から21年3月まで、「異文化を学ぶ」というタイトルで連載。

平成21年度から23年度の間、宝塚歌劇団の早霧せいなさんに本館のイメージキャラクターとして活動していただきました。



出版活動

要覧

国立民族学博物館要覧2011

National Museum of Ethnology: Survey and Guide 2011-12

広報・普及

MINPAKU Anthropology Newsletter

月刊みんぱく

みんぱくカレンダー

展示図録

国立民族学博物館展示ガイド(日本語)

展示図録 『千島・樺太・北海道 アイヌのくらし—ドイツコレクションを中心に—』



design: mitsuo katsui

利用案内

本館案内リーフレット(日本語、英語、こども用、点字)

展示解説シート(日本語、英語、中国語、ハングル)

団体見学利用案内

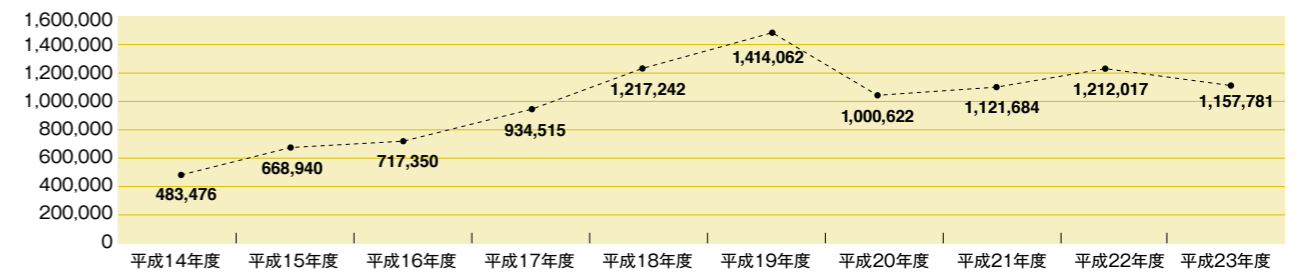
特別展展示案内リーフレット

大学のためのみんぱく活用マニュアル

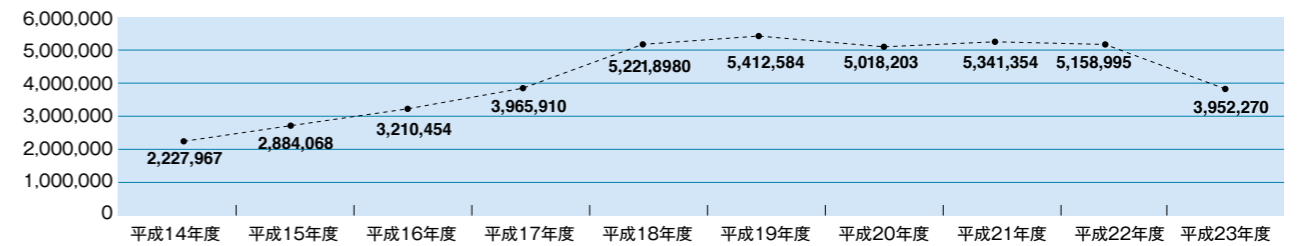
ホームページ <http://www.minpaku.ac.jp/>

平成23年度からリニューアルしたホームページでは、本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育情報の他、刊行物、文献図書資料、標本資料などあらゆる情報を、世界に発信しています。「みんぱく携帯サイト」では、最新のイベント情報や交通案内などを携帯電話からもご覧いただけます。また「みんぱくe-news」を発行し、その時々々の研究情報や、毎月開催している「みんぱくセミナー」、随時おこなわれる「シンポジウム」「研究公演」「みんぱく映画会」「特別展」などのお知らせを、月1回電子メールで配信しています。

訪問者数(Visits) 平成23年度 1,157,781



ページビュー数(Page Views) 平成23年度 3,952,270



平成23年度の入館者数

年間入館者

入館者総数 219,880人

1日平均 714人

開館からの累計 9,695,990人

※大学・短大等からの団体入館者件数

ECC国際外語専門学校、大阪教育大学、大阪芸術大学、大阪国際大学、大阪コミュニケーションアート専門学校、大阪成蹊大学、大阪総合デザイン専門学校、大阪大学、大阪YMCA国際専門学校、京都嵯峨芸術大学、京都橘大学、京都文教大学、熊本デザイン専門学校、神戸学院大学、神戸女学院大学、神戸大学、専門学校アートカレッジ神戸、東北学院大学、ドレスメーカー学院、名古屋学芸大学、奈良女子大学、佛教大学、龍谷大学(以上、国内1団体50名以上)などから91大学3,862人